The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	性について対話するためのツールとしての絵本
Author(s)	松川, 絵里; 横田, 恵子; 本間, 直樹
Citation	臨床哲学. 2006, 7, p. 111-120
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8524
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

性について対話するツールとしての絵本

松川絵里、本間直樹、横田恵子

2005 年より、臨床哲学演習にて「性教育」について考えるための分科会が設けられ、数回のグループワークが行われた。そこでの主な目的は、いわゆる「性教育」を誰が誰に対してどう行うかということについて直接議論するのではなく、どうすれば性について対話しながら考えることができるのかについて話し合うことであった。そこで、こどもが「性」というものに触れ、学ぶためのツールとしての絵本に着目し、性や身体を扱ったいくつかの絵本について議論を重ねた。下記の文章はそこでで議論されたことを三人での対話のかたちに再構成したものである。

■　性について話し合うツールとしての絵本

ま：私はいまアルバイトで小学校五年生の家庭教師をしているんですけど、いまの理科の教科書には、人間の生殖についてしっかりページがとってあるんですね。しっかり体内の図が書いてあってきちんと理科、科学として人の誕生が説明されています。自分が習った記憶がなかったのでびっくりしました。

よ：それは「性教育元年」といって’92 年から文部科学省が、５年生から人の誕生について教えることを決めたんですよね。[注1]

ま：そう。性教育のための教材とかガイドッブックとか、一通り見てみたら、保健体育で月経や射精について習って､理科で受精や妊娠について習うみたいです。教科書では、メダカからはじまって、犬、人間、植物って順にそれぞれの生殖が説明されていたから、こどもがどういうふうに理解するのか楽しみにしてたんです。なのに、どうも学校では人間の生殖だけやらなったようなんですね。

よ：やらなかった？

ま：他は全部教科書どおりに進んでいて、メダカも犬も植物もやったのに、人間の生殖だけ通り過ぎてしまった。それで、これなんだろう？って気になりはじめて、自分だったらどうやるだろうってことを考えた末、生殖の仕組みとか性を直接知るというよりも、もっとからだについて考えられないかなぁ、と思いました。

ほ：そういう教材はあるんですか？

ま：それが小学生用っていうのは見当たらなくて。[注2]　それで見つけたのが、１学期の授業で検討した、もっと小さい子用の『いいタッチわるいタッチ』という絵本なんです。[注3]　これなら、目的は性被害防止だけど、

からだについて書かれているので、かたらについて話し合う材料としては適当なのではないかと思いました。それから、もう一冊の『とにかくさけんでにげるんだ』は、からだについての本ではないけど、同じく性被害防止を目的としてるので比較対照として選びました。

ほ：「性とは何か」を話したり考えたりするのは、大人にとっても簡単なことではないし、一緒に見て話し合うという目的からすれば、からだを扱ったこの絵本の方が適当だった、ということですね。そもそも絵本というのは、大人とこどもの対話のツールとして使えるだろう、ということが出発点だったのですよね。

注１　参考資料　小学校学習指導要領（平成 10 年 12 月）第２章第４節理科〔第５学年〕

１　目標

(1)　植物の発芽から結実までの過程，動物の発生や成長などをそれらにかかわる条件に目を向けながら調べ，見いだした問題を計画的に追究する活動を通して，生命を尊重する態度を育てるとともに，生命の連続性についての見方や考え方を養う。

(2)　物の溶け方，てこ及び物の動きの変化をそれらにかかわる条件に目を向けながら調べ，見いだした問題を計画的に追究したりものづくりをしたりする活動を通して，物の変化の規則性についての見方や考え方を養う。

(3)　天気の変化や流水の様子を時間や水量，自然災害などに目を向けながら調べ，見いだした問題を計画的に追究する活動を通して，気象現象や流水の働きの規則性についての見方や考え方を養う。

２　内容

Ａ　生物とその環境

(1)　植物を育て，植物の発芽，成長及び結実の様子を調べ，植物の発芽，成長及び結実とその条件についての考えをもつようにする。

ア　植物は，種子の中の養分を基にして発芽すること。

イ　植物の発芽には，水，空気及び温度が関係していること。

ウ　植物の成長には，日光や肥料などが関係していること。

エ　花にはおしべやめしべなどがあり，花粉がめしべの先に付くとめしべのもとが実になり，実の中に種子ができること。

(2)　魚を育てたり人の発生についての資料を活用したりして，卵の変化の様子を調べ，動物の発生や成長についての考えをもつようにする。

ア　魚には雌雄があり，生まれた卵は日がたつにつれて中の様子が変化してかえること。

イ　人は，母体内で成長して生まれること。

（「小学校学習指導要領 (平成 10 年 12 月告示、15 年 12 月一部改正) －第 2 章 : 各教科－第 4 節 : 理科」より
http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301/03122601/005.htm　）

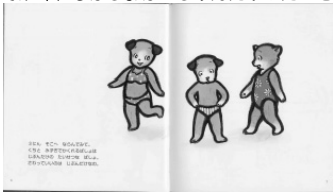
注２　授業では、性教育に関するいくつかの本や教材について検討を行った。例えば、『性教育Q&A100：実践のためのワンポイント・アドバイス小学校編』監修北沢杏子、性教育カリキュラム研究会編、アーニ出版、1998 年。

注３　『いいタッチわるいタッチ：だいじょうぶの絵本２』安藤由紀作、岩崎書店、2001 年。主人公は犬たち。授業でとくに議論したのは以下の場所である。（２頁～ 11 頁）

「アミとランは　ふたごのきょうだい。あるひ、ともだちのニキちゃんが　いいました。「プールにいかない？ママがつれていってくれるよ」／

ニキちゃんのママは　いいました。「きがえたら　シャワーのところに　きてね。いいタッチとわるいタッチの　はなしを　してあげる」／

３にん　そこへ　ならんでみて。くちと　みずぎでかくれるばしょは　じぶんだけのたいせつなばしょ。　さわっていいのは　じぶんだけなの。／



きょうから　おふろに　はいるときも　たいせつなばしょは　じぶんで　あらおうね。／

もし　だれかが、むねや　おなかや　せいきを　さわってきたら、それは　わるいタッチなの。すぐに　はなれて　にげるのよ。　さわられたとき　きもちがよくても、こころが　へんだとおもったら　それが　しっているひとでもね。そして　だれかに　すぐに　はなして。「うん、わかった」って　へんじした。わるいタッチは　すぐ　にける。そして　だれかに　はなしをする。」

『とにかくさけんでにげるんだ：わるい人から身をまもる本』ベティ・ボガホールド作、安藤由紀訳、河原まり子絵岩崎書店、1999 年。

■　大人も一緒に考える

ほ：『とにかくさけんでにげるんだ』は、絵がきれいですよね。ぼくはこちらの方が絵本としての表現が優れてるという印象をもちました。お母さんに包まれているシーンとかとても印象的です。それにくらべて『いいタッチ』の方は言葉（メッセージ）がメインで絵の方は言葉の説明になっているように思えます。

ま：私も『とにかくさけんでにげるんだ』はきれいで完成度が高いとは思うんですけど、実は水彩絵の具のあの色が薄くて淡い感じが不安を掻き立てられて、あんまり好きじゃない（笑）。

よ：これはこどもの反応を調査してこういう絵にしたのか、それとも大人が「こどもが好きだろう」と思ってこういう絵にしたのか、どっちだか分からないんですよね。

ほ：どうでしょうね。こどもが好きな絵と大人が好きな絵は違いますからね。それから『いいタッチ　わるいタッチ』では、性器を指し示す言葉が絵本のなかではグロテスクにみえました（「もし　だれかが､むねや　おなかや　せいきを　さわってきたら､」）。ちなみにぼくは、

いわゆる隠語ではなくて性器の正確な名前をこどもたちに教えることには賛成なんですけど。ひらがなでも「せいき」だけ違う種類の言葉だと感じてしまうのはぼくが大人だからでしょうか。

よ：いろいろ議論がありますよね、性器を指し示す言葉の問題については。

ま：授業では、言葉遣いや絵柄に関する素材検討から、誰が誰に教育するのかという問題が浮かび上がってきましたね。

ほ：『いいタッチわるいタッチ』に関しては、どちらかというとお母さん対象だろう、という結論に至りましたよね。こどもが一人で読んで理解するといよりは、お母さんがこどもを通じてこういう絵本と出会う、と位置づけるのが分かりやすい。「こどもには分かんない」という指摘もありましたが、それはどちらかというと二次的なことだ、ということになりました。この議論でとても参考になったのは、大人が考える絵本っていうのは、大人は何か伝えたいことがあって、そのために言葉やビジュアル表現で工夫するのだけれど、そういう大人からのアプローチをどう考えるかということです。むしろぼくは、何か素材を介して、こどもも大人も両方ともが話し合って考えるきっかけが大切だと思っていて、こういう絵本が本当にそういうきっかけになってるのかどうかがポイントかなと思うんですね。

よ：ご指摘されたうち二点目でいうなら、性の問題っていうのはやはり大人がいろんな後ろめたい感情も込みで、感じたことをこどもに向かって発信するという形をずっととってきた。でも、いまここまで色々な性感染症がこどもたちにひろがって[注4]、やっと性感染症予防の領域で大人が思っている性や価値観を伝えるのでは無理なんだ、押しつけるまでいかなくても伝えようとするのも無理なんだ、こどもどうしで基準も含めてつくりあげていかなきゃいけないって動きがやっと出てきたのかな、って思います。[注5]それから、これらの絵本はほんとはお母さんのための本なんじゃないかというお話でふと思ったのは、お母さんになってはじめて女の人が性に向き合わざるえなくなったんじゃないか、ということですね。そういう意味では、初めての女の人のための性教育の本なんじゃないか、と今お話を聞きながら思いました。

ほ：こどもとの出会いを通じてはじめて自らの性を考え直す、ですか、面白いですね。今のお話から思い出すのは、自分のこどもがセクシュアル・マイノリティであったということを通じてはじめて性の問題に気づく人もいるということです。娘、息子とのディープな関係を通じて捉えられる自分のセクシュアリティというものがあるということですよね。

注４　都市部か地方かにかかわらず、日本の若者の性行動は急激に変化している。10代で性的パートナーの数がすでに３，４人という者も珍しくなく、しかも性的パートナーの数が多いほどコンドーム使用を常態としている者が少ないという調査結果がある。そのため、近年、女性の間ではクラミジアの罹患率が上がり、また若いゲイ男性の間ではHIV陽性率も高い。

注５　例えば大阪では「るるくめいと」の活動など。「るるくめいと」は、2000年に大阪府立松原高校と松原保健所（当時）のコラボレーションによって誕生したピア・グループ。高

校生たちが全国の同世代に「エイズ・性感染症・性」について広く伝え、対話する活動で、演劇ワークショップやプラクシスを基盤とした対話関係の重視を特徴とする。「るるく」とは「知る・考える・動く」というグループのミッション・ステートメントから取った名前。

■ 「いや」から権利を引き出せるか？

ま：それともうひとつ授業で検討した大きな論点として、「プライベートゾーン」[注6]の問題と性教育とどう絡ませるべきかどうかという問題がありましたよね。本間さんがプライベートゾーンはむしろ人権問題として捉えたほうがいいんじゃないか、と言われたときに、「人工のテリトリー」という言い方をされたのがとても分かりやすかった。「テリトリー」って、こどもにとってすごくわかりやすいでしょう？「畳のこの縁からこっち、あたしの陣地やから入らんといてー」って、そういう線引きみたいなのするじゃないですか。

ほ：自分の体の権利という問題と性的体験というのは、重なることはあったとしても同じじゃないですよね。

ま：それで、本人が感じたこと、「いや」っていう気持ちを大事にすべきだという意見に対して、本間さんは、気持ちから権利を導き出すのは難しいっておっしゃたんですよね。

ほ：そうです。自分のいやという気持ちを理由にして、そこから「これはダメなことなんだ」と判断して他人に伝えるのは、ぼくには人工的なことに思えます。だから、権利というのは人工的な線引きであって、こういうシチュエーションだったら「いや」と言いなさい、だったらぼくがこどもだとしてもわかると思う。けれども、こういう感覚をあなたが感じたときに、これはこういうことを意味してるんだから、それはこういうことになるはずなんだっていうことを「自然に」たどっていけるかというと、そうではない。自分が当人だとしたら、分からなくなると思うんです。

ま：最初に授業で『いいタッチわるいタッチ』を読んだとき、こどもがむねを触られていやと感じられるのか？という疑問が出されましたよね。まず、いやなことをいやと思うことが「自然な」ことなのか、という問題がある。それに関して本間さんの考え方でなるほどと思ったのは、たとえばセクハラの場合でも、自分がいやじゃなくっても、そういうシチュエーションでそういう目に遭ったら、いやと思ってるかどうかは別にして、「いや」と言わなければならないんだなって。「いや」と思うことと「いや」と言うことはちがう。そこがすごく発見でした。

よ：そうですね。何かをいやと思うか思わないかは、どういう環境でどうやって育てられてどういう価値観を植えつけられたかに左右されるし。ドメスティックバイオレンス（DV）なんかだと、傍から見てたらすざましい状況でも、本人はいやって思わないこともありますよね。抑圧関係、権力関係の中だったらいやと感じられない、本人は「別にわたしはかまわないの」って言ってるけど、「それすごく侵害されてるよ」という状況もあります。

ま：それを誰が判断できるのかが、分からないんです。本当に大丈夫なの？って聞かれたら、自分の本当の気持ちなんてたぶん分からなくなる。

よ：本人じゃないんですよ、それは。よくお年をめした女性にあるのは、そのときはレイプだなんて思わなくって、いまレイプだのDVだのという概念ができてきて、何十年も前の体験

がわっとよみがえってきて、ああ、あれはそうだったんだって、名前がつく。過去をふりかえれば「あれはいやだった」になるけど、そのときはそうは当たり前だとおもっていた。たとえば夫婦だったら、夫が求めてきたらセックスをすることは当たり前だとおもっていて、耐えたという意識もないんだけど、でも、これだけ読むものにそう書かれてるものを読むと、からだが震えるような怒りを３０年たって感じるとかね。状況が流れていくプロセスの中で、「いまここ」でそれを判断するってすごく難しいことですよね。そうなるとやっぱり、コードっていうのは、もう少し分かる形で定められてないと、当人にまかせてたら弱い人はますます弱くなるなって、そんな気がします。

ほ：ぼくもそう思います。それに、レイプとか深刻な問題までいかないにしても、単純に、気持ちいいかどうかという問題とそれを望むか望まないという問題はイコールじゃない。気持ちわるくないけど、それを望まない、ということがあると思うんですが、それを言うのはけっこう難しい。

よ：だから、そのコードはほんとは誰に向かってまず伝えなければいけないかというと、むしろ、強い側にコード規制をかけますよね。「セクハラ委員会」でもそうだとおもうんですけど。ふたりでお部屋にいるときはドア開けましょう、とか。だから、こういうことでも、誰に対して最初に意識覚醒を促すのかといえば、当のこどもではなくって、周りの大人なのかもしれないな、とを思いました。

注６　『いいタッチわるいタッチ』あとがきより「性教育のすすんだ国では、子どもが物心つかないうちから、それぞれの体にはプライベート・ゾーンがあることを教えていきます。口、胸、性器、お尻の４つの場所は、人間にとって大切な場所で、たとえ大好きな人がさわってきても、「いや！」と、はっきりいっていい。それくらい、自分の体も心も大切なのです。」（29 頁）

■被害防止のために

よ：でも、性教育というとこんなカテゴリーにならざるをえないんでしょうか？『とにかくさけんで逃げるんだ』も、性というより被害防止の話ですよね。

ほ：その辺りも話し合いましたよね。たぶん本当に役に立つという点では、理屈抜きに「赤信号は止まれ」と刷り込むほうが役に立つんじゃないか、考えて判断するプロセスが入ると逆に混乱するんじゃないかという話になりました。

ま：それに関しては二つの絵本で用途がちがうんじゃないか、という話もあったと思います。『いいタッチわるいタッチ』の方は気持ちいいかどうかでこどもに判断を要求してるけど、実際そんな判断している時間あるのか、という疑問が出ました。逆に考える材料としては使えるかもしれないですが。むしろ『とにかくさけんでにげるんだ』のように具体的にシチュエーションを示してくれたほうが、こういう場所でこういう人にこう言われた、「あ、これはあのシーンだ。逃げなきゃ！」となるんじゃないかと。[注7]

よ：でも、本当にこどもと考えるとかあるいは子供どうしで性の問題を考えると、こんな表層的なわかりやすい問題にはならないわけでしょう。性ってこどもであっても多様だと思うし、

多様なもののなかから全員の折り合いのつくところだけを抽出したら、こんな予防の話になっちゃうのでしょうか。この分かりやすさが物足りない、気持ち悪い。それはどっちの本にも感じます。

ほ：これはやっぱり、「自己管理」ということが社会のあらゆる側面で言われつつあって。危機から自らを管理するっていう。「セーファーセックス」もそうですよね。善し悪しはともかく、そういう時代の流れがあって、やっぱり具体的にやらないと問題が起こってる。

よ：セーファーセックスについて言えば、あれは別に個人の思いから立ち上がってきたではなくって、「これ以上感染症がはやらないように」という非常に疫学的な発想からなんですね。今何が起こってるかっていうと、ランドセルや定期券にチップが埋まってて、こどもがみんなGPS装置つけて動き回ってるっていう・・・・こんなに分かりやすくなっても、誰も文句も何も言わない。これと安全が結びつくわけですけれども、この本からGPS装置による管理まで、すぐですよね。

ほ：でもぼくが『とにかくさけんでにげるんだ』の方でいいなって思ったのは、賛成するかどうかは別ですが、「ぼくは判断した」って書いてあることです。それはちょっと管理の発想とはちがうでしょう。日本の『いいタッチわるいタッチ』の方は明らかに主体がお母さんで「今日はこういうお話をしますよ」っていう話なのに、『とにかく』の方は「ぼくはこうした」という報告になってます（「ぼくはいったよ。「おじさん、ぼくのおかあさんはあそこのベンチあそこのベンチにすわっているよ。いま、よぶからね」そして、おおきな声でさけんだ。「おかあさーん！」おじさんは、走ってにげていった。みんなも、みていたよ。ぼくは、にっこりした。だって、ぼくのおかあさんは、ベンチになんかいなかったもん。ぼく、その人をだましたんだ。その人がうそをついたからさ。」（８～９頁より））。「ぼくは」って書いてあるところが、日本とは違うなと。

よ：状況判断をしなさいっていうことを、根底においてますよね。でも。日本の場合、地域なり学校なりがこどもたちに言うのは、『助けを求めなさい』『とにかく誰かの力を求めなさい』っていう。そこがずいぶんちがいますよね。

注７　『とにかくさけんでにげるんだ』より。「性教育のすすんだ国では、子どもが物心つかないうちから、それぞれの体にはプライベート・ゾーンがあることを教えていきます。口、胸、性器、お尻の４つの場所は、人間にとって大切な場所で、たとえ大好きな人がさわってきても、「いや！」と、はっきりいっていい。それくらい、自分の体も心も大切なのです。」（『いいタッチ』29頁）

■性の多様性と性教育

ほ：あとがきにも書かれているように[注8]、こういう本が書かれる背景には、やはり誘拐とか児童虐待といったかなり深刻な事態があって、それに対してこどもを守らなきゃっていうことがありますよね。そのような試み自身はもちろん私も賛成なんですが、他方で、難しいんですが、小児性愛＝異常者＝悪という風潮にも、私は賛成できないんです。こどもを性愛の対象にする／しないということに関して言えば、そもそもセックスとか性愛が何歳以

上からよろしいとかいうのも、人工的・文化的なことで、人間が決めたことじゃないですよね。

よ：うーん。

ほ：また「こども／大人」って言いますけど、日本で言うの「こども」ってすごく幅広い範囲で用いられますよね。たとえば小学生6年生は、常識的に言えば精神的にもからだも自立してないっていうけれど、個人差もとてもあるし、それは本当なのかということもあります。それに、なぜこどもと大人あるいはこどもどうしの性交渉がダメなほんとの理由っていうのは、分からないですよね。

よ：うん。

ほ：ただし、そういう線引きが曖昧なところでも、最低限言えることは、暴力、望まないものからは遠ざかるってことは、それは言ってもいいんじゃないかな、と思うんです。

よ：でも、そういうふうにひとりひとり全部ちがうくらい多様な性的なものがあるなかで、性教育というのはほんとうに成立するのかな、と疑問に思いますね。

ほ：教育という言葉は本来もっと幅のあるもののはずで、何か型にはめ込むということではないはずでしょう。教育学の分野でも「学び」や「学ぶ者」を中心とした考え方が主張されているように、誰から正しいメッセージを伝える／受け取るということではなく、性についての情報も環境のなかから選びとられる重要な情報のひとつであり、自分自身が環境のなかで何を選びとっていくのかをも教育と考えるならば、性教育という言い方もできると思います。

よ：そう考えるならば、性教育というのは自分のなかの多様な性を解き放っていくことになるのかもしれませんね。ピアエデュケーション[注9]をやっている思春期のこどもたち（高校生）なんかも、男性であっても自分のなかの女性性に気づくこともあるし、あるいは例えば、通りを歩いているかわいい女の子にも目がいくのだけど、男の子でも目が大きくて、色が白くて、背が低い子を見るとかわいいなと思うことがある。このかわいいなと思う気持ちと、ガールフレンドが欲しいと思う気持ちは全く別かというとそうではない、ということを問わず語りに話しだすというシーンを見たことがある。

ほ：へーえ、面白いなあ。

よ：私がアメリカに行ったときに、自分のこどもも連れて行って、サンフランシスコというゲイコミュニティがすごく発達していて、そのなかで日常暮らしていた。そのなかで当時14歳であった私の息子のなかで、単純に信じていた自分の男アイデンティティが壊れたらしい。その後、男の先輩をかわいいと思うことと女の彼女が欲しいというのとどう違うのだろうかとか、ぐずぐず言い出した。先輩をかわいいと思う気持ちと女の彼女が欲しいと思うのとどう違うのだろう、とやはり言っていた。こういう立場で性教育を紡いでいくならば、自分のなかでの100パーセントヘテロであるという思い込みが崩れていったり、自分のなかのぜんぜんちがうものがでてきたりするだろう。女の子の場合は、男っぽい格好することもできるわけですが、男の子はなかなかそうはいかないですね。

注8　『いいタッチ』あとがきより。「日本で1999年におこなわれた「子どもと家族のこころとからだの健康調査委員会」による調査では、1282人の全女性回答者のうち、6.4人に1

人の割合で、小学校６年になるまでに、むりやり体や乳房をさわられたり、相手から裸や性器を見せられたりする被害を受けていることがわかりました。299 人の男性回答者も、17.5 人に 1 人の割合で被害を受けていました。また、９人に 1 人の女性が、レイプ、または未遂の被害を受けていて、子どもへの性的虐待は、一般に考えられているよりはるかに深刻であるという結果が明らかにされました。」

注９　「ピアエデュケーション」とは、「るるくめいと」の人たちがやっているような、同じ世代どうしで伝え合う、水平的な学びの試みのこと。

■対話について

よ：性教育って、紡ぐっていうかたちですれば、いろんな違いが花咲いて、そのなかで自分が最も居心地のいいポジションを自然にとれるのがいちばんいいんじゃないでしょうか。やはり高校生たちが言っているように、自分たちのセクシュアリティが二分法でヘテロのコアの部分に一生あるという思い込みがとれるだけでも、随分人生許容範囲が広がるし、きわめてヘテロに近いけれども、たまにはこっちという人もいれば、まんなかでうろうろしている人もいる。大人に説明されるのではなくて、こどもたちが自分たちで見つけていくということがこれからやれたらいいと思います。

ほ：セーファーセックスに関しては、大人発信だとどうしても管理という方向に向かってしまう。性的なものが危険なもの、悪いもの一色とみなされてしまう。るるくのみなさんを見ていると、そうではなくて、「これはこういう理由だから止めておこうね」という言うし、そのなかで自分たちがいままで見てこなかったものに目を向けたり、新しいものへの出会いがあったり、などがあるんじゃないかな。つまり性をタブーとして扱うのではなく、こういうのは、こうこうの理由で止めておいた方がいいけど、でもこっちについては、いままでこう思ってたんだけど、実はこうなんじゃないか、という横に広がっていく力があるような気がします。

よ：それはたぶん、すべてのこどもがそういう力を持っていんだと思います。るるくの子たちも最初は何も知らなかったし、世間の規範どおりの思い込みできているわけですよね。なんか楽しそうだし、いろんなところに行けるし、というだけで来ている点もある。でも、彼女の感性が平均よりも優れているとすれば、対話を紡いていくなかで、人の価値観とかをいったん自分のなかでどんと（キャッチボールのように）受け止めるだけの精神的体力のようなものをもっている。他人の価値観をどんと受けたときには、手が痛いですよね。その痛いときに、放すのでもなく怒るのでもなく、その痛いという感触を、なぜそんなに痛いんだろうという感じで咀嚼する。大人が線路を引くというやり方でなく、それを対話をつうじてやっていくことで彼女たちは 1 年間続けている。対話って、何て言うか、難しいんですよね. .

ほ：分かります。体力がいりますよね。

よ：面白いのは、対話のなかで、ボールを投げてくる人たちは対話をしようという気は全くないわけなんですよね。いじめてやろうとか、「もうはしたない」、「顔にあててやれ」という感じのデッドボールを投げてくるにもかかわらず、彼女らはポンととってしまう。そこが、

普通の高校生よりも運動神経がいいかな？と思います。でも、普通の高校生もストレッチすればああなると思うんです。彼女らにとっても、はじめから対話ということが頭にあったわけではない。

よ：対話をしようとこちらが構えなくても、対話のかたちにもっていけるだけの力が重要だと思います。性を考えるとき、自分のなかの性的多様性を認め、広げていくことが大事かなと思います。そうでなければ、性教育というのは犯罪防止教育になってしまうのではないでしょうか。

■風景としての性の多様性

ほ：やはり、教育という言葉づかいに注意しなければなりませんね。最近私たちは「こどもの哲学」というものに取り組んでいるんですが、例えばデューイはずいぶん昔から、大人がこどもを型にはめるのではなくて、こどもが環境のなかで学んでいくことこそが教育だと考えていたんですね。そこで大人や社会というのはこどもにとって環境になるわけです。このこども中心の学びという観点を性教育に適用するなら、性や性に関する情報がこどもの視点からどのようにピックアップされ、自分のものにされていくのか、という問いがとても重要になると思います。どういう情報が巷に溢れているのか、どういう人が街を歩いているのか、どういう景色がノーマルに広がっているのか。私がパリのボンマルシェで女性服を見ていたときに、ふと気がつくととなりに、見事にレディースを着こなした男性らしき人が服を見ていた... という景色が、です。

よ：アメリカのバークレイでは、スカートをはいてきれいな足を披露しているおじさんがカフェに座っている。ちなみに顔はヒゲを生やしたままでしたが。

ほ：「ヘテロ」と呼ばれる人もたちも実は多様だと思うんです。「ノーマル」なヘテロというのはどのくらいいるのか、というくらい。

よ：ところで、以前ゲイの人に、「ヘテロは不正直だ」と言われました。ゲイは自分の好みをはっきり前に出しますが、ヘテロは「性格」とか「誠実さ」とかグチャグチャ言うのだけれども、基本的には同じなのではないかと。

ま：ヘテロはそういうことがあっても、いちいち言わなくても不自由していないというところがありますね。ヘテロの人にとってはなぜわざわざ言わなければいけないの？という疑問の声もあるかもしれないけれど。

よ：（性に関する本を指しながら）お勉強系は親のウケもよくて買いやすいけれど、こういう話を幼いときから聞いていればずいぶん状況は変わってくると思う。ステレオタイプなセクシュアルマイノリティのイメージがマスコミを通じて流布されていますよね。こうしたイメージは当事者にとって不愉快なだけではなく、私たちにとってもやはり愉快ではないはずです。

ほ：セクシュアルマイノリティの多様性は、例えばインターネットのなかに探せばある。でもわざわざ探して関心のある人たちだけに見つけられるのではなくて、街なかなど、誰の目にも触れる部分に多様性が示されているほうがいいんじゃないでしょうか。

よ：日常の風景としてあることが大切ですね。